

大會抄錄

居延出土の貰買賣簡をめぐって

角谷常子

漢代、對匈奴防衛の據點であった居延から大量に發掘された、いわゆる居延漢簡の中には、卒や吏が行った賣買に關する文書や記録などがあり、これらの經濟生活を知る上で貴重である。特に、錢で俸給が支拂われていたこととも合わせ、さかんに貰賣買（かけ賣り・かけ買ひ）が行われていることから、當地において貨幣經濟が發達していたこと、さらに官側が借金取り立てに強く関わっていたことなどが、從來から指摘されている。

しかし、賣買といっても誰と誰がどのような物を取引していたのか、また様々な形式や内容をもつ關係文書や記録はそれぞれどのような過程で作成されたのか、といった基本的な事柄は専らには論じられていない。そこで本報告では、關係諸簡を整理分類し一つの流れの中に位置づけるとともに、個々の取引の事例を集め、その特徴をつかむことにする。

さらに漢簡によれば、全ての面で文書の上では、人も物も厳しい管理下におかれていたことがわかるが、これらの賣買に對しても官は不正が行われぬよう、「管理」という役割を果たしていたのだらうか。これら取引の事例はあくまでも私的なものであるが、上述の作業の結果をふまえて、このような卒や吏の私的な經濟活動と

官（具體的には候官）との關係にも考察をすすめてみたい。

「錢神論」の時代

葭森健介

六朝貴族をどうとらえるかは中國史研究上の論争點の一つであった。當時の史料を見ると、貴族の家柄、人格や才能、評判、官職、政治姿勢、全てについて「清」という語が使われている。「清」は、基本的に、清廉潔白という經濟的倫理性と深い関わりを持つ。しかし、貴族制の轉機に當たる西晉末において、「錢」即ち富の力で貴族としての政治的、社會的地位を獲得しようとする人々の姿を生々しく描き、諷刺した「錢神論」が書かれている。西晉の全國統一後、活潑化する商品流通と貨幣經濟の進展の中で、貴族は奢侈生活に耽り、一方經濟力により擡頭した寒門寒人が八王の亂に乗じて政治の表舞臺に登場する。こうした状況を背景に賄賂等による榮達の道が開かれ、經濟的實力（富）によって政治的地位を得ようとする風潮が強まった。これは「清」なる人格により社會的名聲を得、それにより政治的地位（貴）を高め、ひいては「富」をも獲得し得るという貴族制、及びこれを支える九品中正制度の理念と眞つ向から對立するものである。こうした「錢神」に代表される「濁」の現實と「清」理念の對決、葛藤が「錢神論」が書かれた背景にあったと考えられる。その中で、「清」の理念を堅持する「士大夫」が六朝貴族制を展開させる上での擔い手となった。六朝貴族制とは、利